

国際大会競技運営に関する一考察

—— 2006バレーボール世界選手権大会(男子)開催を控えて ——

佐々木 克 之

Consideration about the International Convention Game Management

Katsuyuki SASAKI

I. はじめに

本年、2005年7月13日(水)～18日(月)まで、2005 World Grand Prix 女子バレーボール決勝ラウンドが仙台市で開催された。この大会は、国際バレーボール連盟（以下、FIVBと略す）が主催し、1993年から毎年開催され、今年で13回目を迎える女子国際大会である。試合方式は、それぞれの大陸予選を勝ち抜いたアジア代表（4チーム）、欧州代表（4チーム）、北中米代表（3チーム）、南米代表（1チーム）が3グループに分かれて1回戦総当たり戦を行い、上位6チームが決勝ラウンドに進出。さらに6チームの1回戦総当たり戦によって最終順位が決定される。この大会の決勝ラウンドが日本で開催されるのは、1997年の神戸大会に続き2度目であり、将来バレーボール競技を規定する新しいルールをテストしたことも含め、非常に意義のある大会であったと思われる。

将来のバレーボール界を発展させるためには、より多くの国際大会を日本に誘致し、全日本チームが強化を図りながら、日本国内におけるバレーボールの普及に繋げていくことが非常に重要であると思われる。その目的達成のためには、国際試合開催地が今までと同じ中央都市に集中することなく、国際競技大会開催経験が少ない地方都市にも分散させて、その壮観なパフォーマンスで多くの観衆を魅了し、夢と感動を与える試合を一人でも多くの方々に会場に足を運んで観ていただく（百聞は一見にしかず）ことに尽きるとと思われる。佐伯聰夫らは、その著書¹⁾の中で「暮らしが充実し、生活の楽しさが広がれば地域への愛着と誇りが生まれてくる。そこに中央志向を離陸し、コミュニティ・アイデンティティが醸成されれば、地域作りと活性化の重要なコアができることになる。全国や世界を相手にする自信は、その潜在的な基礎を作る。だからスポーツイベントの開催は、地域作りにとって極めて重要な心理的な核になるのである」と述べている。私は今回、初めて「Competition Manager（競技運営部長）」という役職で大

会運営に携わったが、これまで担当していた「Referee Manager」とは異なり、競技運営部に所属する、医事部とセールス・プロモーション部を除いた会場関係（会場設営、警備、施設、テレコム、会場装飾、コート）、総務関係（総務、経理、宿泊輸送、チーム随行、マスメディア、AD）、審判関係（レフェリー、テクニカル、VIS）を統括し、競技運営の一切の責任を持って、競技会場及び試合の管理運営を行う役職であり、その業務内容を知らずして誰もが遂行できる役職ではないし、また内容を熟知していたとしても長期的に担当できる役職ではないことが今回の体験により理解できた。次の担当者がスムーズに競技運営ができるよう、その業務内容を詳細にわたってマニュアル化し伝達することは、大変重要な作業であると思われる。しかしながら今回はその業務内容・経過等を要約し、いくつかの検討・改善点に考察を加えながら、2006年11月に仙台開催が予定されている2006バレーボール世界選手権大会（男子）の成功に結びつけていこうとするものである。

II. 組織委員会・実行委員会

平成17年3月29日に仙台放送（上杉ホール）において、組織委員会設立総会を開催した。宮城県バレーボール協会（以下、MVAと略す）以外の主要な組織委員会構成員は、名誉会長に藤井黎氏（仙台市長）、副会長に森彬大氏（仙台放送代表取締役会長兼社長）、実行委員会の主要構成員には、副会長に武田均氏（仙台市市民局文化スポーツ部スポーツ交流課課長）が委任された。この設立総会の席上で、2004年11月9日仙台大会準備会議をはじめとした、これまでの経過概要を報告し、1. 組織・実行委員会会則、2. 実行委員会に委任する事項、3. 組織・実行委員会事業計画（案）、4. 組織・実行委員会収支決算について議事が進行、承認された。

また、この大会の基本方針及び実践目標が、以下のように公表された。

1. 基本方針

2005ワールドグランプリ女子バレーボール決勝ラウンド仙台大会は、国際バレーボール連盟が主催する、女子バレーボールの世界トップチームがアジア地区に一同に集い行われる大会で、県・市民総参加により開催する大会としてふさわしい大会である。この大会の開催を契機として、県民・市民の生涯スポーツの振興と仙台市及び宮城県さらに東北のイメージアップをはかるにふさわしい大会とする。

2. 実践目標

(1) 市民の総参加による大会

県・市並びに関係機関・団体の緊密な連携のもとに、市民が総力をあげて、大会の運営に万全を期する。

(2) 地域に根ざした大会

住民の参加の下に連携を深め、地域に根ざした大会としてスポーツと文化の振興に寄与する。

(3) 生涯スポーツを推進する大会

本大会を契機として市民の益々の生涯スポーツ活動を推進し、選手の育成強化に努め、仙台市及び宮城県スポーツの水準の飛躍的向上を図る。

(4) 心のふれあいを深める大会

世界の友を温かく迎え、国際的な友情の輪を広げるとともに、仙台市及び宮城県の姿を世界に紹介する。

以上の基本方針に則り、各部署が実践目標を達成するための事業計画を立案し、競技会の開催準備を進めていった。

Ⅲ. 大会事前準備

1. 広報宣伝

平成17年2月22日(火)仙台プラザホテルにおいて、JVA会長；立木正夫氏、国際事業本部長；下山隆志氏、全日本女子監督；柳本晶一氏、そして大会名誉会長；藤井黎氏（仙台市長）にご臨席いただき、合同記者会見が盛大に開催され、多くのマスメディアを通じて報じられた。また、ホストTVの放送を通して視聴者へ告知、仙台市内数カ所に看板掲示等を行った。これらの事前広報宣伝は、本大会における20%を超える高視聴率⁹⁾、連日満員の観客動員に大きな影響を与えたと思われる。

2. 実行委員会への提出書類

(1) 役員名簿

大会日程が7月11日(月)からで、試合日が13日(水)、14日(木)、16日(土)、17日(日)、18日(月)であったことに関連して、日ごとの必要最低役員数を確保し、各役員の所属長への「派遣願い」・本人への「委嘱状」発送作業を早々に着手する必要があるがあった。しかしながら、第1回実行委員会の開催時（平成16年3月）に期限付き提出を求めたが、大会開催が次年度になるため、予定がつかない役員がほとんどであり、公文書の発送作業は実行委員会の計画よりもかなり遅れてしまった。ほとんどの役員をボランティアに頼らざる得ない状況を考えると、公文書の発送及びその時期は重要な問題であり、各部署役員の編成（必要最低人数の確保、役員名簿作成）も含めて検討を要する課題であろう。

(2) 事業計画書

会場関係、総務関係、審判関係の各部署ごとに大会直前までの事業計画及び予算案の提出を求めた。競技運営部としては、合同会議を6月25日(土)予選ラウンド東京大会視察前後に1回ずつ予定し、そのための予算を計上した。

(3) 行動予定表

(財)日本バレーボール協会（以下、JVAと略す）・国際事業本部から各開催地に配布された「2005 WL & WGP 競技会運営機構基準」²⁾及び「2005 WGP 運営管理日程表」³⁾を基に、大会期間中の日ごとの行動予定表を作成・提出し、それらを集計した行動予定表によって各部署の行動が確認できるようになった。

3. 実行委員会、各部署ごとの研修会開催

(1) 実行委員会

実行委員会は3・4・7月に開催され、それぞれの部署が立案した事業計画の進行状況及び今後の取り組み等について2時間程度の時間で報告・協議があった。この後、各部署及び関連部署ごとの詳細な打ち合わせ・調整を行ったが、運営ノウハウの不備等もあり、充実した内容とは言えなかった。もっと各部署が抱える問題点を持ち寄り、協議すべきであったと思われる。

(2) 各部署ごとの研修会

各部署ごとに立案された事業計画を基に、数回にわたり研修会を行った。特に審判関係は、ルールの変更点もあり、レフェリー・サポート・スタッフ（スコアラー、アシスタント・スコアラー、ライン・ジャッジ、フラッグ・ホルダー、モッパー、ボール・リトリバー）の研修会において、モデル・チームを利用して本番さながらの研修を積み重ねた。

【新しいルールのテスト】

- 1) ライン・ジャッジ4人制を2人制に変更
- 2) バック・プレーヤーのアタック・ライン踏み越しをジャッジするためのアタック・ライン・ジャッジを新設

アテネ・オリンピックのバレーボール男子決勝の主審を担当した伊藤博之氏の報告によると、同大会（特に男子試合）において、審判員が見

逃してしまうケースが非常に多かったために、改正案がテストされているとのことであった。

4. 会場、宿泊施設の準備・設営

(1) 事前打ち合わせ

本部実行委員会、開催地実行委員会、委託業者及び今回メイン会場となった仙台市体育館及び練習会場の宮城県スポーツセンター、東北福祉大学、尚絅学院大学、本部・選手宿泊施設との間で、会場内の部屋割り、各部屋ごとに要求される調度品及び調達計画、照明、空調、メイン会場内外の装飾・警備、宿泊施設内会議室、食事、輸送計画等、そしてそれらに関わる諸経費等についても数回にわたり綿密な打ち合わせを行った。

(2) 搬入物品リストの確認

本部実行委員会から仙台会場に搬入される物品リストから、搬入日時・場所を確認し、搬入先担当者（ex. 仙台市体育館事務局）に連絡・許可を求め、担当者が各物品の確認作業を行った。これらの作業については、本部実行委員会担当者と連絡を密にし、できるだけ早く実行計画を立案することが望ましい。

(3) 設 営

7月10日(日)より競技会場設営計画に基づいて、メイン会場の競技場フロアにはFIVB指定床材タラフレックス（GEFRO）設営、コート周辺の設定・用具の設置、競技場観客席設営、各部屋への調度品設置、会場内外装飾、TV放送関係機器の設置、大会役員・選手の宿泊ホテルの会議室、Working Room及び練習会場の設営を各関係委託業者と一緒にを行った。

5. 大会日程に関する問題点

今回の競技形式で問題となったのは、予選ラウンド最終日の7月10日まで6チームがわからず、その6チームが10日まで開催されているHong Kong、Chinese Taipei、Thailandのどこから仙台に入るのかもわから

なかった。時差もあるので、3会場の全試合終了後、10日夜にやっと決定され、具体的には13日からの決勝ラウンドに間に合うよう、チーム通訳を含めた随行関係、宿泊輸送、練習スケジュール、試合組み合わせ等をあわただしく決定し、関係書類を作成しなければならなかった。どのチームが最後に勝ち残るのか、とてもミステリアスな競技形式であると思うが、そのチームを受け入れる開催地としては非常に困惑させられた。せめてチームの移動時間には余裕を持たせるべきであると思う。

IV. 大会期間中

1. 諸会議の準備と運営

(1) 会議の種類⁴⁾

一般に国際試合開催時に行われる会議の種類は、以下のとおりであり、

1)・3)は毎日行われ、それ以外は、試合開始前日に行われた。

1) C/C (FIVB Control Committee) & Lo/C (Local Committee) Joint Meeting

2) Referee & VIS Clinic

3) Referee Meeting

4) General Technical Meeting

5) Press Conference

6) Preliminary Inquiry

(2) 諸会議参加者リスト、配布資料作成・準備

作成した参加者リストに基づき、C/C Delegateから承認を得た会議スケジュール表を役員・チームの来仙時に配布した。机上には英文の卓上ネーム・ボードを作成・準備し、各会議の必要関係書類 (FIVB様式)⁵⁾を作成・配布した。

特に配布資料の席順表、次第表、配布部数については、間違いのないように二重チェックが必要である。

(3) チームからの要求

今回は、ウェイト・トレーニングをするためのジムを紹介して欲しい旨の要求があり、仙台市内の施設を探して紹介したが、利用金額の支払い等で問題が生じた。この件に関して開催地実行委員会で検討した結果、別の目的で使用するため封鎖していた仙台市体育館の専用ジム施設を、急遽開放することになった。仙台市体育館においてこのようなケースは初めてだが、今回そのような措置を取ったことにより、今後も開放しなくてはならなくなるであろう。

いずれにしてもチームからの要求に関しては、同じ拒否するにしても即答は避け、よく検討してから説明することが必要である。

2. 試合日の行動スケジュール

(1) 競技運営部各部署ごとの行動スケジュール

競技運営部の中でも会場関係に携わった役員は、朝8:00に集合し、各部署の作業終了後、後片付け、会場見回り、ミーティングをして解散となるため、毎日の退館時刻は23:00過ぎであった。役割上、各部署ごとの集合時間に違いがあっても当然ではあるが、勤務時間帯の違いについては、今後検討を要する課題と思われる。例としては、休憩・中断なく勤務しているわけではないので、役職内容によって役員数を増員し、勤務時間帯を分割することなどが考えられる。

(2) 各試合ごとの行動スケジュール

各試合ごとに厳密に定められたタイム・テーブルによって進行されたが、一番気を遣わなければならなかったのは、サブ・アリーナ（トレーニング会場）から競技場の選手入場口までの誘導であった。この誘導タイミングが悪いと時間通りに試合を始めることができなくなるからである。特に、第3試合の日本戦は、TV放送の関係で1秒たりとも遅らせることはできなかった。この誘導に関しては、チームの協力なしには通

常の進行があり得ないことから、FIVB C/C Delegateから各チーム宛に協力依頼の文書を発送していただき、なおかつ競技運営部長の立場で私も毎回この誘導に立ち会ったことが、今回のようなスムーズな対応に結びついたと思われる。

3. スポーツによる地域振興

今日、個人レベルのスポーツ・ニーズの多様な広がりからコミュニティ・スポーツの必要性が認識されてきたことと、スポーツの持つコミュニケーション機能の重要性が注目されてきたことに呼応して、「スポーツによる地域振興」をテーマに、自治体の研究会などの自主研究が盛んに行われている。⁶⁾ 我々、開催地実行委員会は、今回の大会開催を機に多くの方々に観戦していただくだけでなく、宮城県バレーボール協会に加盟している小学校・中学校バレーボール連盟に呼びかけ、参加チームと地元の小・中学生の「ふれあい」を求めた国際交流を企画した。幸いなことにこの企画に関して、FIVB及びチームの快諾を得ることができ、仙台市役所を始め、市内5つの小・中学校を表敬訪問していただくことができた。この表敬訪問は、大会期間中の試合のない7月15日(金)に以下のスケジュール内容で行われた。

チーム	時間	表敬訪問先	訪問内容
ITA	11:30~12:00	仙台市立上杉山通小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・全校集会で交流会 ・児童、チーム代表挨拶 ・選手団への質疑応答 ・千羽鶴・七夕飾りの贈呈 ・サインボール・ペナントの贈与 ・サイン会
CUB	12:30~13:00	仙台市立長町中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・第3学年の各学級で交流会 ・語学講座 ・特別支援学級での版画の共同作業 ・サインボールの贈与 ・サイン会

チーム	時 間	表敬訪問先	訪 問 内 容
NED	15:30~16:00	仙台市立五橋中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・全校集会で交流会 ・吹奏学部のオランダ国歌演奏 ・選手団への質疑応答 ・基本プレーの実技披露 ・サインボール・ペナントの贈与 ・サイン会
CHN	13:00~13:30	仙台市立南小泉中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・全校集会で交流会 ・生徒、チーム代表挨拶 ・生徒から選手へ花束贈呈 ・選手団への質疑応答 ・校長挨拶 ・サインボールの贈与
BRA	14:00~14:30	仙台市立富沢中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・校長室で生徒と交流 ・生徒、チーム代表挨拶 ・体育館でバレー部員とクリニック ・七夕画の贈呈 ・サインボールの贈与 ・サイン会
JPN	15:30~16:30	仙台市役所	<ul style="list-style-type: none"> ・仙台市職員の出迎え ・サインボール、シャツの寄贈 ・櫻井副市長より激励の言葉 ・選手団挨拶

今回の大会終了後初めて開催された9月のMVA常任理事会席上で、チームが表敬訪問した各学校から「世界トップレベルの選手たちと一緒に過ごした時間は、言葉や文化の違い等を超えて、生涯忘れられない思い出となった」や「前まで学校行事に消極的だった生徒が、積極的に参加するようになり、明るくなった」等、この企画に対する感謝の報告があり、また訪問時の画像に写る児童・生徒の笑顔から、実践目標である「こころのふれあいを深める大会」に大きく貢献できたことを確信した次第である。これらに関しては、将来の国際大会運営において「理想とされる企画」としてFIVBでも大きく取り上げられた。⁷⁾

V. 大会終了後

1. 競技会場・練習会場・宿泊施設の回収、撤去作業

大会全日程終了日夜から翌日にかけて、委託業者と共に我々、実行委員会の競技関係者数名が立ち会い、主に競技会場の回収、撤去作業、搬入された物品の返却作業が行われた。これらの作業には、実行委員会の立ち会いが必要なことから、もう少し人員の数や配置、時間帯等を検討すべきであろう。

2. 大会関係文書の作成、送付

大会関係文書については、FIVB及び本部実行委員会への報告書がほとんどであるが、特に競技運営部としては、この大会においてテストされた新ルールについての意見書（アンケート）を審判関係から提出した。その内容として、まずライン・ジャッジ2人制に関しては、許容空間外を通過するボールを確認することができないケースがあることから4人制に戻すべきであること、またアタック・ライン・ジャッジに関しては、女子の試合であったこともあり、判定するケースがあまり起こらなかったことや、判定位置によりプレーの妨げになったり、広告パネルを隠してしまうことから、不要であると思われることなどであった。

VI. 最後 に

(財)地域活性化センターの調査⁸⁾によれば、国際競技大会の開催にともなう問題・課題として、財政負担や市民・県民の理解不足、運営のノウハウの不備、ボランティアや人材不足等が挙げられている。そして、何より困難であり、不足しているのは、斬新なアイデアやコンセプトの開発、競技会運営のノウハウや競技者・役員の受け入れ対応、外来客への対応等の人材プログラムを中心とするソフト資源の整備であると述べている。今回の大会開催に関してもそのような傾向が見られ、今後、改善しなくてはならない課題となった。

1. 役員養成事業について

来年11月に開催される2006世界選手権大会の大会期間は、第1ラウンドと第2ラウンドが連続し、移動日、休息日を含めて10日以上になることから、1番大きな課題として取り上げていただきたいのが、増員を含めた役員養成事業であろう。この事業は、各部署ごと早急に取り組まなければならないが、審判関係のように役員に資格が伴うような部署はなおさら切実な問題であり、例えば、宮城県外の近隣協会から役員協力を要請することも1つの手段として有効であると思われる。

2. 諸準備の方法について

準備不足の原因の多くは、FIVB及び本部実行委員会担当者との情報収集不足からきたものと思われる。この件に関しては、今回の貴重な体験を基に各部署ごとに大会運営マニュアルまたはファイルとして保存し、特に本部実行委員会担当者と連絡を密に取り合いながら、事前研修会等を通して問題点を協議し、早期解決していくことが肝要かと思われる。

3. 国際試合の「ショー化」による弊害

日本で開催されるバレーボールの国際試合では、徹底した「ショー化」が行われ、今回もアイドルグループ「NEWS」を起用したことで、20%台の高視聴率と超満員の観客動員ができた。⁹⁾ 金芳保之・松本芳明らは、その著書¹⁰⁾の中で「テレビサイドにとって、スポンサー獲得と高視聴率獲得のためにはスポーツのよりいっそうの「ショー化」が必要であり、そのためにスポーツの競技運営方法のみならず、スポーツそのもののルールや競技形態の変革にまでその影響力を行使するという事態が生じてきたのである」と述べている。バレーボールもこの例外ではなく、オリンピックの開催年ごとにルールの変更を余儀なくされてきた。例えば、1976年には3ボール・システムが導入され¹¹⁾、1989年には最終セット(第5セット)のタイ・ブレイク方式と各セットの得点を17点までに制

限した。¹²⁾ また、1999年には、1～4セットまでサーブ権がなくても点数が入るラリー・ポイントの25点制（第5セットは15点制）になり、¹³⁾ さらに1997年にはTVのCM等との関係で、従来30秒間であったタイム・アウトのほか、1～4セット中に1分間のテクニカル・タイム・アウトが自動的に2回設けられた。¹⁴⁾ 高視聴率を得るためには、テレビ放映時間内の枠に収められるようなルールの変更（ゲームのスピード・アップ）も必要であろうし、より多くの観客を動員したり、関心を集める方法としては、残念ながら「バレーボール競技本来の魅力」または「バレーボール・プレーヤーの卓越したパフォーマンス」だけではなく、アイドルグループの起用（「ショー化」）等による若年層観客の獲得が必要不可欠な状況にあるのである。確かに今日の国際大会運営に関わる収入のほとんどは、高額な放送権料によるものであるから、ある程度は「ショー化」が進行することは仕方ないことではあるが、バレーボールをテレビ向けのスポーツにした仕掛け人のミュンヘン・オリンピックで金メダルを獲得した全日本男子監督・松平康隆氏（現・FIVB名誉副会長、JVA最高顧問）は、「バレーボール競技本来の魅力が失われないか、錯覚を起こして『スター気取り』の選手が増え、ますます弱体化に繋がらないか等の弊害を感じる」と述べている。⁹⁾ 国際大会を数多く誘致することも強化の一環かもしれないが、ジュニアからシニアまで綿密なる長期計画を立て、一貫した指導を行うことにより強化を図り、純粹なるバレーボール・ファンで再び会場を埋め尽くすことができるように努力しなければ、本当の意味での普及・発展には繋がらないと強く要望するものである。

4. 施設と運営

近年、スポーツに限らず様々なイベント開催時における防災対策の重要性が上げられている。今回の競技会場は、競技場内への出入り口が少

なかったために、役員・チームと報道関係者の経路を同じにし、観客の出入り口を2カ所に分散させた。しかし第3試合の日本戦終了後には、かなりの混雑が生じたため、場内アナウンスによる誘導によって時間差退場を呼びかけ、予想される事故を回避することができた。しかしながら、本来役員・チームと報道関係者及び観客の経路は異なるべきであり（ADカードによるパス・コントロール）、非常時でなくても（例えばトイレに行く等）観客の動線が安全に確保されていなければならない。このような誘導経路または喫煙者（喫煙設置場所は屋外）を含めた再入場の方法、飲食施設の設備・内容、及び物販等について、今回の反省を生かしながら、再検討しなければならない。^{6,15)}

今回、いくつかの検討・改善点を述べさせていただいたが、これらを視野に入れながら来年11月に開催される2006バレーボール世界選手権大会の諸準備を進め、今回以上の大会運営の成功に結びつけることによって、バレーボールの普及発展及び生涯スポーツ活動を推進し、スポーツと文化の振興に寄与することができるよう期待するものである。

引用・参考文献、資料

- 1) 佐伯聰夫著編；スポーツイベントの展開と地域社会形成 P.24～29 不昧堂出版
2000
- 2) (財)日本バレーボール協会 国際事業本部；2005 WL & WGP 競技会運営機構基準
P.2～19
- 3) (財)日本バレーボール協会 国際事業本部；2005 WGP 運営管理日程表
- 4) 国際バレーボール連盟；イベント開催マスタープラン（FIVB イベント運営チェック
シート）P.2～8
- 5) 国際バレーボール連盟 公式ホームページ（オフィシャル・フォーム）；
<http://www.fivb.org/EN/Volleyball/Forms/Index.html>
- 6) 広瀬一朗著；メディアスポーツ P.145～157 読売新聞 1997
- 7) 国際バレーボール連盟 公式ホームページ（ワールドグランプリ2005）；
<http://www.fivb.org/EN/Volleyball/Competitions/Worldgrandprix/2005/index.asp?sm=12>
- 8) (財)地域活性化センター；国際スポーツイベントによる地域づくりに関する調査研究
事業 P.9～13 地域活性化センター 1999
- 9) スポーツ・ライブの行方；朝日新聞 2005 12月6日～12月10日掲載
- 10) 金芳保之・松本芳明著；現代生活とスポーツ文化 P.99～103 大修館書店 1997
- 11) 池田久造著；バレーボールの変遷とその背景 P.323～324 日本文化出版 1985
- 12) (財)日本バレーボール協会；6人制バレーボール競技規則 1989年版 P.5, 38～39
- 13) (財)日本バレーボール協会；6人制バレーボール競技規則 1999年版 P.4, 34～35
- 14) (財)日本バレーボール協会；6人制バレーボール競技規則 1997年版 P.4, 61
- 15) 同志社スポーツ政策フォーラム編著；スポーツの法と政策 P.194～196 ミネルヴァ
書房 2001